

平成27年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	がっこうほうじん わせだたいがく わせだたいがくほんじょうこうとうがくいん				②所在都道府県	埼玉県
27～31	① 学校名	学校法人早稲田大学 早稲田大学本庄高等学院					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	在籍者総数 1021名 各学年 8クラス編成 卒業生全員が早稲田大学に進学することが可能	
普通科 (全日制)	359名	330名	332名		1021名		
⑥研究開発構 想名	国際共生のためのパートナーシップ構築力育成プログラム						
⑦研究開発の 概要	本研究開発は、授業内と課外活動に組み込まれ交流校との国際連携にもつながる「マイクロプロジェクト」への参加経験を通じて、知力・共感力・行動力を育み、多様な価値観を持つ人々とのパートナーシップを構築し維持できるグローバル人材の育成を目指す。成果を地域に還元し、アジアのパートナーシップ構築に貢献する。						
⑧ 研究開発の 内容等	⑧-1 全体	<p>(1) 目的・目標 本研究では、グローバル人材に求められる資質を、各コミュニティ固有の課題解決のために複合的な視点から企画を創造し、国内外の仲間と望ましい人間関係を構築しながら協働で課題に取り組む力と想定する。この資質を構成する「企画力・発想力」「知力・判断力」「共感力」「コミュニケーション力」「行動力」を育むために、少人数のグループで特定の課題に取り組む「マイクロプロジェクト」を様々な授業と課外活動に組み込み、生徒同士のチームワーク、またはパートナーとのチームワークを経験する場を提供する。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説 海外の高校との交流・多文化受容・地域との連携は、本校では学校文化の特色となっている。修学旅行は中国・台湾・韓国の3コースで、連携校の交流を核とした事前準備学習を通年授業に組み入れている。2002年からはSSH指定校として数々の国内外学術交流活動にも取り組み、成果をパートナーと共有してきた。地元本庄市では小学校や近隣の高校および生産者との協働企画やスポーツ交流に取り組んでいる。早稲田大学と連携した被災地支援企画への参加、国内外の各種コンテスト等への参加も盛んである。こうした過去の事例から、優れたチームワークが優れた成果を生み出すことを本校は経験的に学んでいる。</p> <p>しかし取り組みは多彩でも単発的で、交流や協働で育てうる資質についての可視化と共有は不十分である。また、交流・協働プロジェクトの分野を広げることも長年の課題になっている。グローバル人材育成を明確に意図したシラバスを構築し、全教科と課外活動・国際連携活動に適切に配置されたマイクロプロジェクトに生徒が参加することで、学校がパートナーシップ構築力を涵養する場になれるという仮説に基づき、本研究開発に取り組むこととする。</p> <p>(3) 成果の普及 「プロセス」と「成果物」の両面での成果普及を図る。「プロセス」普及の方法は①高校生による学会発表や学術雑誌への投稿、②高校生の活動を深化させ地域のグローバル化への貢献による。「成果物」普及は①SGH報告会、②高校生国際学会WaISEC (Waseda International Symposium on Education and Culture) の開催、③出版物・デジタル資料の本校ホームページでの公開による。</p>					
		⑧-2 課題研究	<p>(1) 課題研究内容 「国際共生のためのパートナーシップ構築力育成プログラム」を開発するために、A「教科内プロジェクト群」、B「課外活動プロジェクト群」、C「国際連携プロジェクト群」の3種類の場で研究を進めていく。</p> <p>A「教科内プロジェクト群」(実施方法・検証評価を含む) A-1 「グローバル人材と人権」教材開発 2年次必修科目「政治・経済」において「人権」をキー概念に据えた授業を開発し、知力・思考力を涵養する。フィールドワークを交え検証する。優秀レポートや優秀プレゼンテーションは共同フォーラム等で発表し、自己の検証の正当性を確認する。</p> <p>A-2 総合的学習の時間を活用した「卒業論文」指導法開発 卒業論文の作成には教員による系統的な事前指導が有効であることを証明する。高度な論文を作成することを通じて、グローバル社会における問題意識の重要性、課題に対して複眼的な思考で解決策を出すことの大切さを学ばせる。事前事後のアンケートや成果物で指導の効果を検証する。卒業論文については情報を広く国内外の高校生に発信する。</p>				

	<p>A-3 「世界文化遺産」紡績業を軸にする教科横断型授業の開発 日本の近代化を支えた紡績会社を地元本庄市と中国上海に視座を置き、地歴科、国語科の授業を通して学ぶことで、知力を鍛え教養を涵養する。上海の交流校とも共同研究を行い、歴史を踏まえた両国の未来について考える。共同フォーラム等で成果を発表し、検証評価する。</p> <p>B. 「課外活動プロジェクト群」 (実施方法・検証評価を含む)</p> <p>B-1. 世界のヤングリーダーとの友好を育むインバウンド観光プランの考案・実行と相互評価の開発 ビジネスにおける企画推進・マネジメント力の向上に資する課題としてインバウンド観光ツアープランを考案し実行する。また、交流校との相互評価、外部評価を交え検証する。</p> <p>B-2. 「食による国際共生の取組」の開発 世界の多様な食文化を理解し、食による国際共生を目指す。異なる食文化を持つ人々が調理し、食事をすることにより理解を深める。事前事後のアンケート、外国人へのインタビューを実施し、研究の到達度を検証評価する。</p> <p>B-3. 海外交流校との相互訪問とオンライン交流で進める発信型プロジェクトの開発 オンライン交流と対面交流を組み合わせ、共感力とコミュニケーション力を育てる。交流校と共同で World Youth Meeting 参加、および「Free paper」発行に取り組む。グループワークのスキルの変化を量的・質的に検証する。</p> <p>C. 「国際連携プロジェクト群」 (実施方法・検証評価を含む)</p> <p>C-1. 中国 (北京)、韓国、台湾の高校とのテーマ学習型交流の開発 交流内容を改善し、次世代型の修学旅行の在り方を開発する。共同研究の在り方、ミニ学会の実施について検討する。日中、日台、日韓双方のアンケートや相互評価により検証する。</p> <p>C-2. 国際共生学を踏まえたボランティア活動の充実 パートナーシップ構築のゴールである国際共生について、地球問題群の視点で考察検討する。教科内での学習や輪講によって知見を深め、ボランティア活動によって実践力・行動力を身に付ける。成果を国内外に向けて発信することで、自己やグループの到達度を検証評価する。</p> <p>C-3. WaISEC (Waseda International Symposium on Education and Culture) 開発・実施 国内外の高校生を招き、研究成果の発表の場とするとともに、国を超えて参集する志を同じくする仲間との出会いを持つことにより良きパートナーシップの涵養を目指す。アンケート実施、外部機関による評価、研究会、学会等での発表と評価を行う。</p>
⑧ -3 上 記 以 外	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 Tutorial English については次年度の平成 28 年実施に向け、平成 27 年度は早稲田大学の協力の下で環境整備を行う。また従前より行っていた英語外部テスト (GTEC/TOEIC IP) に新たに TOEFL ITP を加える。英語プレゼンテーション指導は英文推敲を早稲田大学のグローバルエデュケーションセンターのライティング指導の下に行う。また早稲田大学国際教養学部や GLCA の海外からの留学生による授業支援や生徒との文化交流を図る。上級者対象の取り出しクラスおよびスタンフォード大学の遠隔講義で帰国生の更なる英語力の伸長を意図し、一般生徒と帰国生それぞれの英語力向上を生徒の進路状況と絡めて検証できるようにする。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 該当なし</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備、教育課程課外の取組内容・実施方法 附属校として新たな進学制度を提案する。高校と大学との接続を有機的に行う意味から、SGH 事業において課題研究を深化させた生徒は、その課題研究をさらに深化させることのできる学部優先的に進学できる、いわゆる「SGH 枠」を設定すべく各学部へ提案する。 本校は開校以来 33 年間帰国生枠を設け積極的に受入れをしてきた。全校生徒に海外での経験を積ませるため 3 年次に修学旅行で 1984 年から協定締結校の北京大学附属中学との交流をはじめ近年はコースを台湾と韓国にも拡大している (学年 320 人対象)。また協定締結校や提携校からの短期の受け入れは毎年 60 名ほどであるが、今後は長期の留学者数や受入数を増やす。また各種プログラムやコンテストへの参加を促す方策を計画している。</p>
⑨その他 特記事項	なし